

土曜 ライフ・楽しむ

くじけず 笑って思い返す日へ

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



春、新年度が始まりました。本来なら、卒業式を終えた子どもが足取りも軽くなり、入学式の記念写真を撮る家族の晴れやかな笑顔がはじける心も浮き立つ季節のはずです。

しかし、このコロナ禍ではそうもいかず、あるべき日常ははるかかなたです。入社早々テレワークを強いられ、誰とも会えずにいる新人社員がいるこの話も聞きます。

今年不自由な時を過ごした彼ら彼女らは、数年後、またはもっと先にこの特別な時代をどう思い出すのでしょうか。大変だからこそ際立った記憶になるに違いありません。



不自由な今の若者たちの苦労には及びませんが、私は若いころ、自らの道を定めきれず、何かを見つけようと旅に出たことがあります。信州にたどり着き、ある町の旧家に寄宿して、食事や風呂にありつづのを楽しみに畑仕事や蔵の整理を手伝いました。

ある日その主人に「一人きりで蚕を飼っている人がいる。手伝ってこい」と町はずれのおばあさんを紹介されました。都会育ちの私は蚕を見たくて喜んで訪問しました。

蚕小屋をのぞくと雨音かと思ふ大きな音が聞こえます。これは桑の葉を食べる蚕の音。「すいすい」。生命力そのものや」と驚き感動しました。

ふと足元を見るとたくさんの蚕が棚から落ち、うごめいています。かわいそうに思い、とっさに拾い上げました。それを奥でおばあさんが見ていたようで、顔を上げた私を見て目が笑っていました。

できそこないの都会っ子が冷やかに来たと身構えていたのかも知れませんが、彼女が大切に慈しみ、育てている「お蚕様」を無心に素手でつまんだのが良かったのでしょうか。一気に打ち解け、一緒に汗をかくて働き、二人だけで漬物とみそ汁の夕食をとりながら色々話しました。とても温かく、素敵な時間でした。半世紀も前のことですが、鮮



明によみがえってきます。今、人と会うことが多いので一人であることが多いのですが、様々な思い出が頭の中を巡ります。反省すべきことは反省するとして、こんな楽しい記憶だけよみがえってくると良いのですがなかなかそうはいきません。

今は日本中、いや世界中の人々が過去に経験したことのない禍の中にいます。誰にとっても決して良い思い出にはならないはず、しかし身に降りかかる不幸と嘆いてばかりではいかにも寂しい。いつになるかわかりませんが、「あの時は大変だった。でも何とか乗り切ったな」と笑って思い返すことができる日がくることを待ち望んでいます。

若人よ、そして元若人よ、くじけずがんばりましょう。